

## 「江戸湾騒動」(1903)

劇場通りのどこかでなくしてしまったのだ。人通りの多い本通りを横切っている運河の一つに架かった橋の上で、少し乱暴に押されたような気がしていた。目尻の上がつた手の早いどこかのスリが、サイフに入っていた五十銭余りのお金を見てちょうど今頃、しめしめとほくそ笑んでいることだつてありうる。でも自分自身が不注意でなくしてしまったとも考えられないことはない、と思つたりもした。

かすかな望みを胸に抱いて、二十回もあらゆるポケットを捜してみたが、サイフは見つからなかった。何も入っていないズボンの後ろポケットの中を、手はさまよっていた。そうしていると、べらべらよくしゃべる食堂の店主が発狂したように、「二十五銭！ 二十五銭払え！ 二十五銭だよ！」と怒鳴っている光景を悲しげに眺めていた。

「そんなことを言つたつて、俺のサイフがないんだよ！」と若者は反論した。「きつとどつかになくしたんだ」

そうすると、店主はかんかんになつて手を振り上げ、かん高い声でまくし立てた。「二十五銭！ 二十五銭！ 二十五銭払え！」

すでにそのときには、かなりの数の野次馬たちに取り囲まれており、アルフ・デイヴィスにしてみれば厄介なことになつていた。

「ささいなことで、馬鹿けている」とアルフは思った。大したことでもないのに騒ぎすぎだ！だが、ここできつぱりと何かをしなければ。あの野次馬たちのあいだを猛スピードで通り抜けて逃げ去るという考えや、文句を言うやつは誰でも殴りとばすということも一瞬思い浮かんでおいた。ところが、このようなことを見透かしているかのように、ずんぐりとした食堂の従業員の一人在片方の目で意地悪く睨みつけながら、腕をつかんだ。

「さあ、払え！ すぐ、払え！ 二十五銭だ！」と、店主は怒り狂つて、がらがら声で怒鳴り散らした。

アルフも、悔しさのあまり頬が紅潮していたが、意地であるものを捜そうとした。サイフは諦めていたが、どこかに散らばっているかもしれない小銭に最後の望みをかけようと思つたのだ。すると、上着にある小さな小銭用ポケットの中から、十銭硬貨一枚と五銭銅貨一枚が見つかった。さらに最近十銭硬貨をどこかになくしていたことを思いだし、小銭用ポケットの縫い目に切りこみを入れると、裏地の奥のほうからその硬貨も見つかった。これでやっと全部で二十五銭になり、夕食代を払える金額が手元にそろつた。そこでお金を渡すと、店主はその小銭を数え終え

急に静かになり、それどころかこびるようにお辞儀をした。野次馬たちも全員こびるようにお辞儀をして、いつの間にかいなくなっていた。

アルフ・デイヴィスという若者は、十六歳になったばかりで、アメリカのスクーター船（二本マストの帆船）である『アーニー・マイン』号の船乗りであった。その船は横浜に寄港しており、旬のアザラシの肉をロンドン向けに船積みをしているところであった。これで上陸するのは二度めになるのだが、東洋人が当惑しているのを垣間見るのは初めてだった。若者は、頭を何回もさげるのを見て笑っていたが、すぐあとに別の厄介な問題に直面せざるをえなかった。どうやって自分の船に乗りこむことができるのか？ そのときはもう夜の十一時になっており、船に備えつけの小型船など一隻も岸には見あたらなかった。おまけに日本人の船頭を雇うことも、ポケットにはもうお金がまったくなかったので、考えられなかった。

船員仲間をなんとか捜そうと、アルフは棧橋さんばしのところまでやって来た。横浜では長い埠頭ふとうなど一つもない。船舶は錨いかりにつながられて停泊しており、数百の短足の者たちが客を小型船に乗せて往復することによって生計を立てている。

サンパン船（小型平底船）に乗っている十数人の男や子どもたちがアルフを呼びとめ、乗らないか、と声をかけた。アルフはかほそい脚の人のよさそうな、最も愛想あいせがいい年配の男が乗っている船を選んだ。そのサンパン船に乗りこみ、腰を下ろした。とても暗かったので、老人が何をしているのかわからなかった。でも、船が岸から離れて出港する支度したくなどどうやら何もしていないようだ。ついに男は足を引きずってアルフのもとにやって来て、顔をのぞき込んだ。

「十銭」とその男は言った。

「うん、わかっているよ。十銭だろ」とアルフは、ぞんざいな返事をした。「でも、急いでよ。アメリカのスクーター船までだ」

「十銭。すぐ払ってよ」老人はそう言い張った。

「今すぐ払え」という悪意に満ちた言葉に、アルフは全身に血がのぼり、「アメリカのスクーター船まで連れて行ったら払うよ」と怒鳴りつけた。

ところが男はしつこく前に立ち続けて手を出し、「今、十銭払ってよ」と言うだけであった。そこでアルフは、真意を説明しようとした。「お金は今は一銭も持っていない。サイフをなくしてしまったんだ。けど、お金を払う気持ちはある。アメリカのスクーター船まで乗せてくれれば、そのときすぐに支払うつもりだ。いや、アメリカの船にすぐに乗船しなくともいいんだ。船仲間を呼ぶよ。そうするとまず最初に十銭を支払ってくれる。それから、乗船する。もちろん、それでいいだろ」

以上のような説明に対し、その人のよさそうな老人は、「今すぐ、十銭払ってよ」と返答する。そのうえさらに困ったことに、他のサンパン船の男たちが棧橋の階段に腰を下ろして、じつと二人の会話を耳を傾けているのだ。

アルフはくやしくなり、かっとして立ち上がると、サンパン船を降りようとした。すると老人は、袖に手をかけて引きとめ、「じゃあ、代わりにシャツをくれ。そうすれば、アメリカのスクーナー船まで乗せるよ」と申し出てきた。

まさにそのとき、アメリカ人としてのアルフの独立心が胸の奥深いところから炎のように燃えあがった。アングロ・サクソン人というのは、生まれつき強制されて何かをするのを嫌う人種なのだ。だからこのことはアルフにとって、まったく強盗に遭遇したのと同様であった。十銭はアメリカの六セントに相当し、シャツは二ドルも出して購入したものであった。しかもそのシャツは質の良い物で、まだ新品であった。

アルフは何も言わずに男に背を向け、棧橋の端のほうまで走っていった。野次馬たちはげらげら笑いながら、すぐ後を追いかけてきた。ほとんどの者たちはがっしりしていて筋肉質で、七月の夜はうだるような暑さだったので、最小限の服を身に着けている程度であった。海で働く者はどんな人種であっても、荒っぽく乱暴なものである。そのような波止場で働く大勢の者たちに囲まれて、日本の大都会にある棧橋の端っこで真夜中に外にいるのがいかに危険なことであるかということを、アルフは強く感じた。

もじやもじやの黒髪と残忍な目つきをした大男が、やって来た。その他の者たちはその男の後ろからついて来て、次のような話に加わった。

「靴を渡せ」と、その大男は言った。「すぐにおまえの靴をよこせ。そうすりゃ、俺がアメリカの船まで乗せてやってもいいぜ」

アルフは首を横に振った。すると野次馬たちは、申し出を受け入れるようにと大声で叫んだ。だがアングロ・サクソンの体質のために、人に威嚇いかくされたり苛めいじられたりすることはありえないことだ。進んで立ち向かうことはあっても、他の人種に追いつめられることは白人の誇りが許さない。だから、男たちがアルフに強制的に何かをさせようとしても、白人の強情な頑固さをわき起こさせるだけであった。わびしい期待だけで行動しているこのような男たちと、同様の性質をアルフも持っていた。人里離れた棧橋で星空の下、肩で押し分けて獲物を狙っているような連中に包囲されていたが、服のひと縫いでもぶんどられるという侮辱に屈服するぐらいなら、死んだほうがましだと心に決めていた。これは物の値段の問題ではない。人の正義が危うくなっているのである。

そのとき野次馬たちの誰かが、後ろから強い力で押ししてきた。アルフは、目をぎらぎらさせて、急に後ろを向いた。そうすると、野次馬たちも不本意ながら退却した。ところが、連中たちはますます騒々しくなってきた。アルフの身に着けているあらゆるものを、次から次へと要求するようになったのだ。ついにこのような要求は、男たちのえらく健康的な肺から思いつき、それらも一斉に発せられた。

アルフは、それまでずっと黙っていたが、危険な事態になっており、逃げるが勝ちだと思った。そして断固たる闘争心あふれる顔つきと、先のがった鋼鉄のようなぎらぎらした目つきで、体を堂々と大胆に身構えた。こうした対決姿勢は船乗りたちに十分に伝わり、アルフが棧橋の岸の端に向かって歩きたすと、道を空けざるをえなくなった。けれども船乗りたちは、それまで以上に大きな声で叫んだり笑ったりしながら、アルフのまわりをぞろぞろとついて来た。そのとき、アルフと同じぐらいの背格好と体格の若僧が、ずうずうしくも頭から帽子をひったくってしまった。だが、帽子をかぶる前にその男はアルフに肩を強打され、石の上に転倒させられてしまった。

帽子は若僧の手から離れ、多くの野次馬の足元に落ちて見えなくなってしまった。アルフは一瞬、「帽子を奴らの手に渡すことは、船乗りとしての誇りが許さない」と考えた。帽子が飛んでいった方向に行くと、強そうな男が裸足で踏んづけているのがすぐにわかった。その男は、自分の体重を無神経にかけていた。アルフは、隙を狙って帽子を取り出そうとしたが、うまくいかなかった。そこで脚を押しつけようとしたが、男はぶつぶつうなっているだけであった。その対決はまさに真つ向勝負で、アルフはその挑戦を受け入れた。男の後ろにすばやく片方の脚を置き、胸に向かって肩を強く打ちおろした。この一瞬の力強い一撃で男は耐えられなくなって、後方に投げつけられた。

このようにしてアルフは帽子を取り返して、拳骨げんこつを振り上げた。そして、後方からの攻撃を防ぐために体を回転させると、そこにいた連中たちはあわてて飛び上がり退却した。このことがまさに望むところであった。アルフと岸の端には何もなかった。棧橋は狭かった。横を通り過ぎようとしている男たちに真つ向から立ち向かい拳骨で威嚇しながら、アルフは退却していった。後ろ向きに歩きながら男たちを食い止めるというのは、はらはらどきどきすることであった。でも世界じゅうの浅黒い人種は、今日まで白人の鉄拳に敬意を払うことを学習してきた。アルフに勝利をもたらしたのは、自分の攻撃的な戦いぶりというより、多くの白人の船員たちが過去に戦ってきた闘争であった。

棧橋と岸が隣接しているところには港警察署があり、アルフは小柄でこぎつぱりした担当の警

部補をからかおうという気持ちもおおいにあり、明かりがついた執務室に後ずさりをして入っていった。サンパン船の男たちは静かでおとなしくなり、開けっ放しにしてあるドアの前で、まるでハエのように群がっていた。そこからは、中でどんなことが起こっているのかや、何が話されているのかがよくわかった。

アルフは、自分の窮地を簡潔に説明し、異国での外国人の特権として、警部補に警察の船でアメリカの船まで連れて行ってくれるように要求した。すると、すべての規則をそらで覚えている警部補は、港の警察が渡船業者ではないということや、警察の船には時刻に遅れた一文無しの船員を自分の船まで送っていくような役目はないということを説明した。そのほかに、サンパン船の男たちは根っから強引であり、法律の範囲内で商売をするのであれば警部補として何もできない、とも述べた。前もって船賃を集めるのはサンパン船の男たちの権利であり、客を乗せて最後に料金を徴収するようには誰も命令できないのである。アルフはその正当性は認めたが、命令ができないのなら説得してほしいとお願いした。警部補はその願いを受けいれ、警察署の玄関で野次馬たちに話しかけた。ところが連中も、自分たちの権利は熟知しており、演説が終わると、例の憎悪を引き起こすような「十銭！ すぐに払え！ 今すぐに払え！」と、一斉に叫んだ。

「やはり、何もできないね」と、警部補は言った。ちなみにその英語は完璧なものであった。「でも、危害を与えたり嫌がらせはしないように警告しておいたので、少なくとも身の安全は確保できたと思う。もう真夜中を過ぎており外は暖かいので、どこかで横になって睡眠を取ったらどうかね。規則に違反していないのなら、警察署内で寝かせてやるんだが。。」

アルフは、警部補の親切と丁寧な言葉に感謝したが、サンパン船の男たちは自分たちの人種としての誇りと執拗さとを喚起かんきしており、問題はそんなに簡単には解決しないと思った。夜に道端で寝ることは、敗北を認めることでもあった。

「サンパン船の男たちは、俺をアメリカの船まで連れて行くことを拒否してるんですか？」と聞くと、警部補はうなずいた。「警察の船でも連れてってくれないんですね」とも聞いてみたが、同様であった。

「それでは、俺が勝手にアメリカの船までたどり着くことを阻止することができるというのは、規則にはないですね」と念を押すと、警部補は困った顔つきをして、「連絡船がないんだよ」と答えた。

「そんなのは問題じゃない」とアルフは、かつとなつて言い放った。「自分がアメリカの船にたどり着ければ、皆が満足し誰にも危害を加えないよね」

「そうだ、その通りだ」と、困りきった警部補は返事をし、次のように続けた。「でも、自分でア

メリカ船のところまで行くことなんてできやしない」

「じゃあ、見ていてよ」と返事をした。

アルフは、帽子を警察署の床に置いた。そして底の浅い靴を蹴って左右に脱ぎ捨て、ズボンもシャツも放り投げた。

「次のことをしっかり心に留めておいてください」と、鳴り響くような声で言い放った。「アメリカ合衆国の市民として、皆さん方や横浜市、そして日本政府がそれらの衣服などに全責任を持つものとするという判決を下す。おやすみなさい」

びっくり仰天している船員たちを脇にかき分け、玄関口を突進して、棧橋まで走っていった。

野次馬たちはすぐに我に返り、新しい事態になったので歓喜し大声を出しながらあとをついて来た。このことは横浜の船員たちのあいだで、忘れられない夜の出来事となった。岸の端までアルフは一直線に走っていき、間髪を容れずきれいに整然と海に飛びこんだ。そして、力強い片抜き手泳法（水をかいた腕を前方に返す際に、横体で上方の片腕だけ水面に抜き出す泳法）で水をかいて泳いだ。好奇心からちよつと立ち止まると、暗闇の棧橋くらやまのあたりから呼び止める声が聞こえてきた。

仰向きになり、海に浮かびながら次のような声を聞いた。「わかった、わかった！」と騒々しい声を聞き取ることができた。「すぐに払わなくていいよ、あとでいいよ！ 戻って来い、すぐに戻って来い！ あとで払ってもいいよ！」

「もう結構だ」と、アルフは言い返した。「一銭も払わないぜ。あばよ」

それから、『アニー・マイン』号がどこにあるのか突きとめようと、あたりを見まわした。船は、少なくとも一マイル（約一・六キロメートル）は離れているだろう。暗闇の中で方向や位置を正確にとらえるのは、容易なことではない。兵士だけが扱える炎に、最初に目が留まった。あれは、アメリカの軍艦『ランカスター』号にちがいない。その左後方のどこかに、『アニー・マイン』号がきつとあるのだろう。左のほうには、三つの明かりが並んでいるのがわかった。でもあれは、捜しているスクーター船ではないだろう。その間、アルフの頭は混乱していた。そこで仰向きになり目を閉じて、昼間に見た港の情景を頭に思い浮かべようとした。すると喜びのあまり荒い息づかいになり、体を元に戻した。あの三つの明かりは、大きなイギリスの不定期貨物船にちがいないと思った。ということは、スクーター船はその三つの明かりと『ランカスター』号の間のことかあるにちがいない。ずっとその方向を見つめていたが、ほの暗いだけであった。だが見当をつけた一点に目を移すと、一つの明かりが燃え上がっていた。『アニー・マイン』号の停泊灯であった。

空には星が輝き、快適な遊泳であった。周りの空気も海水の温度と同じぐらいで、生ぬるいミ

ルクの温度ほどであった。海水の強力な塩味が口の中で感じられ、そのひりひりとした痛みが手足にも伝わってきて、猛烈な心臓の絶え間ない鼓動も加わり、生きていることが実感できて幸せな気分になった。

こうしたすばらしいことを除けば、遊泳は平穏なものであった。右手に明るく光っている『ランカスター』号を通り過ぎ、左手にはイギリスの不定期貨物船があった。まもなく『アニー・マイン』号が頭上にぼんやりと大きく視界に入ってきた。そして船にぶら下がっている縄梯子なわぼしを握りしめ、音をたてないように甲板かんぱんの上まで自分の体を持ち上げていった。まわりには誰も見当たらなかった。調理室の中に明かりがともっていたので覗いてみると、船長の息子が一人で停泊当直の任についており、クーヒーを入れているところであった。アルフは、船首楼せんしゅうろう（船体の船首に設けられる上甲板より一段と高い部分）のほうに向かって歩いていった。寝台には男たちのいびきが響きわたっており、その閉じこめられた船内に入ると、耐えられないほどの高温になっていると思った。だから、薄い綿のシャツと胸当てつきズボンに着がえ、毛布と枕を小脇に抱えながら甲板に上がっていき、船首楼の先端部分に近づいた。

アルフはそこどうととしてしていると、こちらの方にやって来る小型船の音と誰かが停泊当直者に話しかけている声に目が覚めた。それは港警察の船であり、わくわくするような会話が展開される予感がした。予想通り、船長の息子は差し出された衣服が誰のものがわかった。船員のアルフ・デイヴィスのものだったのだ。「何があったんですか？ いいや、アルフ・デイヴィスは乗船していません。上陸していると思いますよ。そうじゃないのか！ じゃあ、海におぼれたんじゃないか！」その後、警部補と船長の息子の会話は同時に行われたので、アルフにはちんぷんかんぷんであった。そして二人はやって来て、乗組員たちを起こした。すると、アルフ・デイヴィスは船首楼にはいない、と船員は眠くてぶつぶつ言いながら返答した。船長の息子が横浜警察とその行動に対して怒りを増大させると、警部補は絶望的な調子で規則について説明した。

アルフは、船首楼の先端部分から立ち上がると、手を差し出して次のように言った。

「その衣服を受け取りましょう。早速船舶までお持ちいただき、まことにありがとうございます」「おまえをここまでなぜ連れてきてくれなかったのか、どうしてもわからないんだ」と、船長の息子は言った。

それに対して警部補は、一言も言わずに少しおどおどしたような態度で、衣服を正当な所有者に手渡した。

翌日、アルフが横浜に上陸しようとしたときには、大声を出し身振り手振りよろしく、えらく礼儀をわきまえたサンパン船の男たちが自分の船に乗ってもらおうと、異常なほど必死に声をか

けてきた。誰一人として、乗船して「すぐ払え」とは言わなかった。それどころか、アルフが棧橋に降りる際に例の十銭を手渡そうとすると、直立不動で首を横に振った。

「結構ですよ。支払わなくてもいいです。無料です。とても素晴らしいお方なので、お金などいりません」

その後『アニー・マイン』号が港に滞在している期間中、サンパン船の男たちは、アルフ・デイヴィスの手から一切お金は受け取らなかった。アルフの勇気と独立心に対する賞賛の気持ちから、港に自由に出入りできる特権を与えたのであった。